

石橋中学校区

【目指す子ども像】

地域とつながり社会に貢献できる子ども

【実践研究課題】

教育活動全体を通じて、居がいのある学級・学校づくりを推進し、児童生徒の自己肯定感を高め、豊かな情操と道徳性を備えた、社会の中で進んでよい行いができる子どもの育成

各部会の取組

<学習指導部会>

【児童生徒の実態】

- ・小学校…明るく元気な児童が多い。学習に対する主体性や論理的に考えることに課題がある。学力差が大きい。タイピング力の差が大きい。
- ・中学校…友達の良さを認め、協力して学習に取り組める。自分の考えを論理的に思考し、表現することに課題を抱えている。

【部会のねらい】

- ・授業を通して、級友と意見を交流することで、自分の考えを主体的に表現できる生徒を育てる。
- ・タイピング力を育成する取組を協議する。

| 視点 | <A> 教育課程の工夫改善 | 教育活動の連続性の確保 | <C> 教職員間の連続・協働 | <D> 家庭・地域との連携・協力 |
|----|------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
|----|------------------|--------------------|-------------------|---------------------|

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・キーボードのタイピング力を伸ばす手立てを協議し実践する。 ⇒ ①ローマ字の知識や運用力を高める活動の工夫について協議する。 ②各学年の具体的な数値目標を共有する。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・各学校で、タイピング力を育成する取組を実践することができた。また、2回の実測値から、伸びを見取ることができた。小中学校ともに数値が伸びていた。学校の中には教育計画に組み入れたり、決まった曜日に実践したりする学校があった。また、振り返り活動の際にタイピングを行うなど、授業の中に組入れることに成功した事例もあった。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・タイピングを行うことに重点を置きすぎたために、本来の目的である学力向上を疎かにしてしまう恐れがある。 ・低学年の実施については各校意見が分かれている。来年度は慎重に進めていく方向で検討する。 |



グループ活動の様子



思考ツールの活用



タイピング力の育成

<道徳教育推進部会>

【児童生徒の実態】

- ・素直で穏やかな児童生徒が多い。道徳の授業では、友達の意見を聞いて、自分の考えを広げたり深めたりする様子が見られる。また、ペアや小グループの活動では自分の意見を表現できているが、一斉の場面では発表者が偏る傾向も見られる。
- ・道徳の時間に自分事として考えているが、生活の中で道徳的実践力として生かせていない場面も見られる。

【部会のねらい】

- ・地域への愛着をもち、社会に貢献できる。
- ・自分を見つめ、考えを表現(話す・書く)することができる。
- ・道徳の時間を通して深めた道徳的価値への理解をもとに、普段の生活における道徳的実践力を高めることができる。

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・心を育てる月間の各校での実施 「地域とつながり社会に貢献できる子」「心の教育」に関連させる。 他の部会と時期・内容の調整を図って活動を実施する。 (プロジェクト委員会、児童/生徒指導部会、特別活動部会など) 重点化、分散化の工夫 ・道徳の授業の指導の工夫(ローテーション道徳の実施、公開授業の実施など)、情報交換 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・「心を育てる月間」の定着が図れた。児童生徒にも意識付けができた。 ・指導の工夫は各校での研究が中心となったが、教職員間で協働し、計画をしたり、授業実践をしたりすることで、授業力向上を図ることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・心を育てる月間の実施の成果は大きいので、今後も他の部会との連携を図るなどをして、無理なく続けられるようにしていく必要がある。 ・経験年数などの差や校務の多忙さなどから、授業研究や情報交換をすることに難しさを感じる教職員が多い。コミュニケーションを密にして、交流がしやすい雰囲気作りを工夫していく必要がある。 ・校内で公開している授業を中学校区の先生方も参加するなど、今行っている公開授業を生かして、さらに授業力向上を図れるとよい。 |



各校の取組

<児童・生徒指導部会>

【児童生徒の実態】

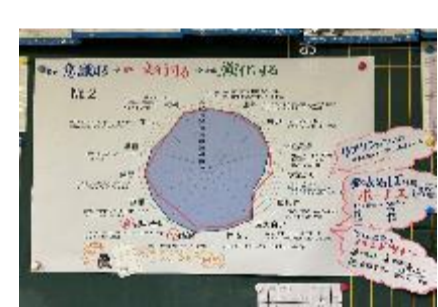
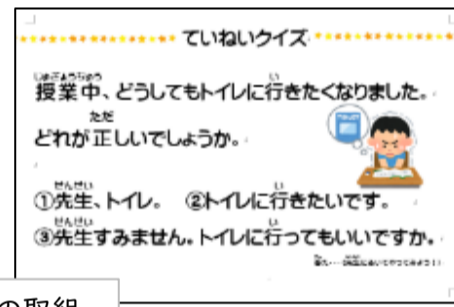
- 不登校傾向の児童生徒が増加しており、学年が上がるにつれ、心の悩みを抱える児童・生徒の増加、家庭的な難しさや、保護者からのサポートを得ることが難しい家庭が多い。
- 人間関係が希薄で、ちょっとしたことを気にし、傷つき、トラブルやいじめに発展するだけでなく、関係修復に時間がかかる場合がある。

【部会のねらい】

- ①学級内や集団内の人間関係に目を向け、自他ともに尊重できる
- ②学級の良さに目を向けて、学級や学校に居がい感をもつことができる

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ①いじめ防止強調月間(6月、11月)に合わせて、人間関係作りや互いの良さを認め合う活動を行う。 ②学級内の「つながり」や「輪」を意識し、いじめ防止に向けた取組を、発信する。(発達段階に合わせて) ③教育相談やいじめアンケートを通して、実態把握や児童生徒理解に努める。 ④いじめ報告書を共有することで、各校の現状把握やいじめ対応について共通理解を図る。 |
| 成果 | 児童生徒がよりよい人間関係を醸成していることが見えてきた。お互いの良さを認め合う活動は自己肯定感を高め、お互いを尊重し、居がい感を得るための活動として効果的だった。規範意識を高める指導において、ゴールイメージを共有したことで、指導の視点が明確になり、5校で認識を揃えて指導に当たることができた。また、教員の意識向上にもつながった。 |
| 課題 | お互いの良さを認め合う活動を、日常的に取り入れたことで、形骸化し、効果が薄れてしまっている部分もある。規範意識に個人差がある。個人差の解消には、家庭への啓発や協力依頼が不可欠である。 |



各校の取組

<特別活動部会>

【児童生徒の実態】

小学校…明るく素直な児童が多い。学校行事に前向きな児童が多いが、内容によっては後ろ向きになる児童もいる。
 中学校…礼儀正しく素直な生徒が多い。時間を守れないなど、けじめがない生徒も見受けられる。

【部会のねらい】

昨年度に引き続き、「学級力アンケート」を活用し、学級の課題を見つけ、話し合いを行うことによって自己肯定感やコミュニケーション能力の向上を高めていく。児童・生徒が自分の学級に居がいを感じ、安心して周囲とつながりをもつことができる。

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|-----------|--|
| 取組 | ①学級力アンケートを年2回実施し、児童生徒が学級に帰属意識をもてるようにする。結果をもとに、クラスをよりよくするための取組について話し合う。 ②石橋中学校区の小中学校でキャリアパスポートを共有し、情報交換を行う。 ③子ども未来プロジェクトの2本柱として、「小中合同クリーン活動+レク」や「感謝を伝える活動」を実施する。 |
| 成果 | ①クラスでの話し合いは、代表児童生徒が司会を務め進行する形式や机を並べて対面する会議形式など様々だったが、子どもたち一人一人が当事者意識をもって主体的に取り組むことができた。クラスの問題点に着目し改善策を見出す中で、一人一人の帰属意識やクラス全体の連帯感が醸成された。 ②中学生のキャリアパスポートを小学校の先生が閲覧することで、小学校での取組が中学校生活に生かされる様子を具体的に確認できた。 ③先生方への感謝の気持ちをどう伝えるか、小学生と中学生が直接話し合うことで、実情をふまえた新しいアイデアの創出につながった。 |
| 課題 | ①学級力アンケートでは、一部の項目で成果がマンネリ化する傾向や、課題以外の分野で伸び悩む傾向が見られた。これらを解決するためには、新しい視点や方法を取り入れた継続的なアプローチが必要である。 ②枚数や回数等の統一を図ったことで、今後具体的にどのように運用していくかを検討する必要がある。 ③感謝を伝える活動の開始が11月ということで、各校の取組状況や成果・課題を互いに共有するには至らなかった。活動をもう少し早期に開始したい。 |



学級の話合いの様子



子ども未来プロジェクトの様子



<特別支援教育部会>

【児童生徒の実態】

学校生活・集団生活に適応して生活できている児童生徒が多いが、集団に適応できず特別な支援を要する児童生徒は、年々増加傾向にある。

【部会のねらい】

自分の特性を知り、よさを伸ばそうと進んで行動することができる。

| 視点 | <A> 教育課程の工夫改善 | 教育活動の連続性の確保 | <C> 教職員間の連続・協働 | <D> 家庭・地域との連携・協力 |
|----|------------------|--------------------|-------------------|---------------------|
|----|------------------|--------------------|-------------------|---------------------|

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・特別な支援が必要な児童生徒に対する効果的な支援や具体策の情報交換を行い、指導方法や目標などの事例を示す。 ・石橋中学校区内の特別支援学級交流会を実施し、自分のよさに気付かせ自己有用感を高める。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・各校で実際に行っている合理的配慮について情報交換を行い、支援の方向性を再確認しながら表にまとめることができた。 ・石橋中学校区内の特別支援学級交流会を2回実施したことで、交流が深まり、自分や友達のよさに気付くことができた。また、石橋中学校を会場としたことで、児童や保護者が中学校に対する安心感を高めることができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・合理的配慮の具体策を精選する中で、学習環境整備を中学校区内で統一する必要性が見えてきたため、今後情報交換や配慮点の統一を図っていく必要がある。 ・交流会を行うにあたり、十分な準備が必要となり、担当校の負担が大きかった。また、工作は作ることに一生懸命になってしまい、児童生徒の交流が十分に図れなかった。継続するには内容の再検討が必要である。 |



小中合同交流会



| | |
|---|---|
| ・授業で読書や算数などの授業で使った に、中学校区に広がるよう取り組んでいく。 | ・授業にむかひやすく説明したものを準備し、 で準備をすすめる。 ・授業に行く前に、授業内容について説明してあ てていく。 |
| ・自分の思い通りに話したいという、短く で話していることを多く見られること で話さない。 | ・グループワークの準備をすすめる。 ・話しているときに話の内容が、思い通りの に話さないという状態の中、そのように話 にのまらざるというのを考えさせる。 |
| ・話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 | ・自分の思い通りに話したいという、短く で話していることを多く見られること で話さない。 |
| ・話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 | ・自分の思い通りに話したいという、短く で話していることを多く見られること で話さない。 |
| ・話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 話の途中で話の途中で話したいという、 | ・自分の思い通りに話したいという、短く で話していることを多く見られること で話さない。 |



自閉症・情緒障がいの児童生徒の教育における合理的配慮

<体力増進部会>

【児童生徒の実態】

- 新体力テストの結果において投力・立ち幅跳びの数値が全国平均を下回る傾向にある。
- 体育の授業や行事には積極的に取り組む児童生徒が多い。しかし、外遊び等自ら体を動かすことに前向きではない児童・生徒も少なからずおり、その中の児童生徒の多くが運動習慣が身に付いていなかったり、運動に苦手意識をもっていたりする。

【部会のねらい】

- 体力テストの記録の向上を重点課題とし、体力向上のよりよい指導につなげる。
- 児童生徒が「運動が楽しい」「運動したい」という関心意欲をもつことができる。
- 運動に親しむ習慣を身に付けさせる。(外で遊びたくなるような工夫・教科体育での運動量の確保・業間運動や遊具の工夫)
- 小学校、中学校間でのギャップを埋める。

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校から中学校へのギャップを軽減するために、石橋中学校区統一の体操を徹底して行う。 ・各校で、教科体育や業間、昼休み等を活用して体力向上への取組を行う。 ・運動に親しむ習慣を身に付けさせるために、休み時間における児童生徒の外遊びの機会を増やすよう、教員が外での運動を児童・生徒に呼びかけたり、教員自ら外遊びに加わって運動する楽しさを共有したりする。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどのクラスが正しい動きを身に付け、その動きを活動に生かすことができた。 ・体育の授業への導入がスムーズになり、学習に集中しやすい環境づくりにつながった。 ・石橋中学校作成の動画により、より丁寧に体操を指導することができた。 ・また、それにより児童も動きを意識して行えるようになってきた。 ・体操を全校で取り組むことで、「地域として同じ体操をする一体感」が生まれた。 ・小→中への移行に対する安心感が高まった。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・動きが雑な児童生徒もいる。 ・石橋体操を覚え切れていないクラスもある。 ・運動会の時期にはラジオ体操を行っているので、石橋体操ができない時期がある。 |



各校の取組の様子

<健康増進・食育部会>

【児童生徒の実態】

- ・基本的な生活習慣が乱れる児童生徒がいる。
- ・食事のマナーが定着していない児童生徒がいる。
- ・市の課題である朝食摂取状況について、石橋中学校区の「毎日食べる」割合は85%で前年度(87.5%)と比べ若干低下した。「主食とおかず」を食べている割合は56.8%であった。令和4年度は62.7%、令和5年度は59.3%と年々減少している。(令和6年10月調査)

【部会のねらい】

望ましい生活習慣を確立することができる。

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|----|--|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒自身で、自らの健康生活を振り返り、正しい生活習慣の確立を目指す指導を行う。 ・「いしばし元気っ子週間」を実施し、石橋中学校区全体で「食事のマナー」について、共通した指導を実施する。 ・朝食指導について、学年に応じて継続して実施する。 ・年1回、健康増進・食育部会だより「いしばし元気っ子」を発行し、家庭への啓発を図る。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き、各校共通して「いしばし元気っ子週間」を実施し、「食事のマナー」について、校内での指導を行った。振り返りシートに保護者からの一言をいただくことで、家庭との連携を図ることができた。 ・健康増進・食育部会だより「いしばし元気っ子」を発行し、家庭への啓発を行った。 ・朝食指導について、各学校で学年に応じた指導を継続して行った。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・下野市で実施の朝食アンケートで、石橋中学校区全体として、朝食を毎日食べる児童生徒の割合が88.0%であった。昨年度の割合(85%)から増加した。また、「主食とおかず」を食べている割合は56.7%と、昨年度56.8%とほぼ同率であった。朝食指導において、引き続き学年の実態に応じた指導を行い、喫食率の向上、内容の充実を図れるようにする。 ・「いしばし元気っ子週間」を定着させ、児童生徒自身で自らの健康生活を振り返ることができる指導を継続して行う。 ・来年度は、「睡眠」について取組を行う予定。 |



栄養士による呼びかけ



児童生徒による呼びかけ



健康増進・食育だより

<地域連携部会>

【児童生徒の実態】

徐々にコロナ禍以前の様子に戻ってきているが、コロナ禍で地域の行事に参加する機会が減り、そのままになってしまっているところも多い。地域とのつながりが薄れてきている。

【部会のねらい】

- ・地域に貢献することができる。
- ・地域の方々に感謝の気持ちをもつ。

| 視点 | <A> 教育課程の 工夫改善 | 教育活動の 連続性の確保 | <C> 教職員間の 連続・協働 | <D> 家庭・地域との 連携・協力 |
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|
|----|----------------------|------------------------|-----------------------|-------------------------|

| | |
|----|---|
| 取組 | <ul style="list-style-type: none"> ・地域との関わりが薄れてきている今、地域及び校内のクリーン活動を行うことで、地域及び学校への愛着をもたせる。 ・地域の方々との関わりを深めていくため、まずは活動についての発信をしっかりとっていく。 ・ふるさと学習や家庭教育学級についての情報交換を行う。 |
| 成果 | <ul style="list-style-type: none"> ・中学生が作成したポスターを自治会の回覧板で回したり、地域の各所に貼ったりすることでクリーン活動の周知をした。 ・学校運営協議会委員の方や、保護者、地域の方が、クリーン活動に参加してくださり、児童生徒と一緒に活動できた。 ・クリーン活動の後に、レクリエーションを行うことで、小学生と中学生が楽しく交流することができた。 |
| 課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・クリーン活動に参加してくださった保護者、地域の方が少なかった。(4つの学校を合わせて40名程) ・クリーン活動が延期になった場合、地域の方への周知方法を、分かりやすくする必要がある。 ・ふるさと学習や家庭教育学級についての情報交換を十分にできなかった。 |



小中合同クリーン活動(石橋小)



小中合同クリーン活動(古山小)



小中合同クリーン活動(石北小)



小中合同クリーン活動(細谷小)

成果と課題

石橋中学校区としての成果指標から見た成果

(知) 全国学力・学習状況調査(国語)の思考・判断・表現等 B書くことに関する記述式問題の平均点

○本地区の生徒の解答率は県平均と同等の結果である。

△書く問題における無解答率が、解答を選択する問題の無解答率より高くなる傾向にある。

(徳) 「自分にはよいところがある」「周りの人にやさしくしている」という学校評価項目における児童・生徒の評価

○自分のよさについての評価では、全体的に肯定的な回答が高く、自己肯定感が高いことがわかる。

○周りへの思いやりについても、肯定的な回答が大変高い。

△中学生になると、自分のよさを理解している生徒の割合が小学生に比べて減る。

(体) 体力テスト「投げる力」と「柔軟性」の数値

○投げる力や柔軟性において、数値が昨年度より良くなっている。

△県平均や全国平均と比較すると、数値が下回る学年もある。

(全体の成果)

○各部会で9年間を見据えた取組がされ、各校でその成果が表れている。

△各部会の取組が重複することがあったので、各部会同士がつながり、取組を共有することで、さらに児童生徒の成長につなげたい。

△成果指標と目指す子ども像にずれがある。成果指標とその評価規準の見直しが必要である。